The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

西域出土法華章疏について

金　炳　坤

1．西域出土法華章疏の基礎的研究

未だ曽て世に伝えられなかったもの，古記録にその書名があっても今日散逸して伝わらないもの，既に伝えられて居るものでも古い写本で文句の異なっているもの，及び稀覯の文献．以上の四つの基準（矢吹［1932: 3–4］）を以て1925年までに矢吹慶輝博士によって日本にもたらされた西域出土文献は，その後さらに選別され，1932年には『大正蔵』第85巻に収められるようになった．ただし，そのうち古逸部に収録されている以下の五種六本の法華章疏については，対比しうる文献資料の不十分さゆえに，研究を進展させる糸口をつかめずに膠着した状態が続いていた．しかし，近年筆者によって明らかとなった紀国寺慧浄（578–645?）の『妙法蓮華経纘述』（以下『纘述』）の存在により，本研究分野に対する新たな試みができるようになったのである．

略語	『大正蔵』（T.85）	原本	総行数	在品	推定年代[1]
Ⅰ①	No. 2748 170a05–176c17	S. 2733	293	薬草品～勧持品	508年写訖
Ⅰ②	No. 2748 172a20–179c28	**S. 4102**	408	化城品～踊出品	6世紀初期
Ⅱ	No. 2749 180a05–189b20	**S. 4107**	512	寿量品～不軽品	7世紀
Ⅲ	No. 2750 189b26–194c01	S. 2463	247	随喜品～普賢品	6世紀
Ⅳ	No. 2751 194c07–199a12	S. 2439	240	神力品～普賢品	6世紀初期
Ⅴ	No. 2752 199a18–205b05	S. 2662	373	前後103番の問答	7・8世紀

『大正蔵』ではⅠ②とⅡの原本をそれぞれ［S.37］（妙法蓮華経信解品第四）［S.520］（報恩寺方等道場　牓）とするが，それは『鳴沙餘韻解説』（以下『解説』）に示されたスタイン本の番号（矢吹［1931］の未整理旧番号）をそのまま踏襲したことによる誤りで，正しくは上表のとおりである．『解説』（p.97）に『法華論』の原本を［S. 2502］とするのも同様の理由による誤りで，正しくは［S.2504］である．

本稿ではこれまであまり注目されてこなかった上記の六本に対する従来の研究成果を概略し，それに新たな成果を加えるべく，新出資料『纘述』との対比を中

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

心に，その関連性が窺われるⅡとⅤの二本について詳述する．

2．古逸部収録本の研究史

曽て藤枝晃博士はこれらの研究史について「2748–2752　法華經関係注疏　すでに矢吹博士が捜集して《鳴沙餘韻》pls.25–33 に書影を揚げ，《同解説》pp.94–107 に夫々の特徴乃至古逸未傳として注意すべき点を指摘するが，その後これらに関する研究の著しいものを聞かないので，こゝに附加すべきことはすくない」（藤枝［1959–63］）との見解を示された．あれから半世紀を経た現在では，16 本の関連論考において 47 点の西域出土法華章疏について論及する，平井宥慶教授による総合的な研究がなされており，そのなかにこれらも網羅されている．従って以下では，矢吹慶輝博士と平井宥慶教授の研究成果をもとに，これを検証しながらその特筆すべき点について論述する．

Ⅰ．①［S.2733］・②［S.4102］・『法華義記巻第三』（T.85 No.2748）

矢吹［1932: 25–27］，『解説』（pp.94–97），平井［1978; 93］に詳しい．①の識語は「受（ママ）記品，化城喩品，第四五百弟子受記品，授学無学人記品，法師品，見宝塔品，持品，比丘**惠業**許／**正始五年**（508）五月十日釋**道周**所集在中原廣德寺**寫**訖（奥書は本文とは異なる筆跡）」があり，②は「五百弟子受記品，授学無学人記品，法師品第十，見宝塔品，**持品第十二**，安楽行品，従地踊出品，**法花義記第三**　比丘**法順寫**記也」がある．重なる五品半の内容が過不足なく合致するため，同疏の別人による異写であることが判る．508 年以前に成立した北魏の元号をもつ古逸疏にして「提婆品」（490 年法意訳[2]）を欠く訳出当初の 27 品体裁の『妙法華』を底本とする．法雲の『法華義記』より先行すると見られ，凡そ四巻[3]を以て完結せるものと推定されている．矢吹［1932: 26］には「道生，法雲，吉藏，智顗の諸疏と對照したが全く符合しない」とある．その抄訳（薬草喩品の後半偈部，受（ママ）記品・法師品の全訳）が存し（平井［1992］），法雲疏との比較研究がある（菅野［1991］）．ことに他疏との関係において注目すべき点は，平井［1993: 650］に「羅什系譜に入る注釈本」「法雲疏より早い成立と思われる」と推定されている［淡 32］（信解品～授記品）との関連性であり，［淡 32］の「薬草喩品」の後半にある偈文の科段釈が，Ⅰ①のそれと同一であることが指摘されている（平井［1978: 109–11］）．これも抄訳（薬草喩品の後半偈部，授記品の全訳）が存する（平井［1992］）．

Ⅱ．［S.4107］・『法華経疏』（T.85 No.2749）

『解説』（p.102），平井［1991］に詳しい．識語は「分別功徳品第十七，隨喜功

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

徳品第十八，法師功徳品第十九，常不軽菩薩品第廿」がある．『解説』に「現存諸法華疏中，唐窺基の玄賛に近似するも，分科其の他に於いて全く異疏たるを知る」とある．ところで『玄賛』に先行する法華疏に『纘述』があり，その一部（序品，譬喩品～授記品）が韓国に刊本として四巻が現存する．「化城喩品」以下は散逸したが，栖復（-879-）の『法華経玄賛要集』（以下『要集』）に「紀国云」と彼の逸文が散見されるため，これをもとにⅡと対比しうることができる．結論からいうと，『要集』の該当箇所に見られる「紀国云」の15例（含，又云・名のみ）のうち，13例が本疏において一致或いは類似することが確認できた．要するに［S.4107］は『纘述』を適宜に抄出している［S.6494］（序品～譬喩品・金［2010: 12］）のケースと同様『纘述』の抄出である可能性が極めて高いことが判明したのである．また平井教授は［菜11］（寿量品～普門品）との関係について「両本は明瞭に別本であるにもかかわらず，同一釈文が散見される」と指摘し，その成立を［菜11］［S.4107］『玄賛』の順に推定したが（平井［1991: 377-79］），『纘述』の成立は少なくとも639年以前と見られるため，玄奘訳（645-）が用いられる［菜11］は『纘述』以降さらにいえば『玄賛』以降ということになろうか．ともあれこの二本からは『玄賛』の『纘述』に対する依拠の顕著さを窺い知ることができる．このほかに西域出土文献のなかから『纘述』そのものを見出し得たため，ここに報告しておきたい．中国国家図書館蔵敦煌本に存する［致15］（序品）がそれであり，韓国に現存する刊本（宝物206号）の巻第二（序品）に該当し，その二十四張右六行目の「四思惟定」から，三十三張右九行目の「希有因成」までを有する．また『纘述』がその後の法華章疏に及ぼした影響については拙稿［2011］を参照されたい．なお，『要集』と［S.4107］との対応関係については別稿を期したい．

Ⅲ．［S.2463］・『法華経疏』（T.85 No.2750）

『解説』（pp.99-100），平井［1978: 114-17］に詳しい．当該写本は紙背にある曇曠（-763-）の『大乗入道次第開決』（T.85 No.2823）を書写するために貼り合せたもので，本疏はその表に在り『大正蔵』は「随喜品」の後半から「普賢品」の末尾までを収めている．しかし『大正蔵』は『鳴沙餘韻』の書影（pls.31-32・144MF[4] の37-49コマ・以下②）を載せただけで，写本にはこの前半部にあたる53行（144MFの28-31コマ・以下①）が含まれている．すなわち本疏は①と②を合わせて300行（寿量品～普賢品）が存することになる．①の識語は「分別功徳品」があり，②は「法師功徳品，常不軽品，如来神力品，嘱累品，薬王本事品，妙音菩薩品，観音品，陀羅尼品，妙荘厳王品，普賢品」がある．間に「分別品」の後半

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

から「随喜品」の前半を欠く．普門品重頌偈（569年闍那崛多訳）の釈が見当たらないことからそれ以前の成立と見られる．異解を提示しているがその出典は不明であり，矢吹［1932: 27］には「法雲の義記，吉蔵の疏略，智顗の文句，窺基の玄賛を始め之と符合するものを見ない」とある．他疏との関係については，先述した［淡32］の各品の開口句，すなわち「薬草喩品」の「此品何由而興」と「授記品」の「此品所以而來」が，本疏では「妙莊嚴王品」（随喜品は欠損）を除き，この何れかの形を有すること及び注釈方法の形態的特質が類似することが平井教授によって指摘されており，結んで「この両本は，慎重を期して同一疏とは確定しないが，限りなく近く同時代的形状を呈していることは疑いない」（平井［1993: 651–52］）との見解を示している．また藤枝博士は［S.113v］（序品～方便品）と注釈形式及び筆跡が似ていることから「同疏であるか」と推測したが，平井教授は上記の特質点が確認できないことから「同一本とは認め難い」（平井［1993: 652］）とする．

Ⅳ．［S.2439］・『法華経疏』（T.85 No.2751）

『解説』（pp.100–101），平井［1978; 93］，金［2013］に詳しい．識語に「嘱累品，薬王品，妙音品，觀世音品，陀羅尼品，妙莊厳王品，普賢品」がある．平井教授によって本疏［S.2439］（以下③）と［暑70］（法師功徳品～神力品・以下②）が同本離片であることが指摘されており，その論拠（②≡③）として以下の三点を示している．1．この疏の特徴の一つは，科段構成に注釈勢力を費やしていること〈経の**大段第四**流通文の一致・神力品の分科の一致〉である，2．注釈方法が，各品の冒頭句〈**従此已下**〉も含めて，酷似する，3．その書体が著しく近似する．これに筆者によって［P.4567］（分別品～法師功徳品・以下①）もがその同本離片であることが指摘されている．その根拠（①≡②）は〈［経の**大段第**三の］果門中の大段第四が一致〉するからである．従って本疏は**一経四段**[5]の構造を特徴とする同本離片ということになる．詳細は拙稿［2013］を参照されたい．さて本疏はⅢと同様普門品重頌偈の釈を欠く．Ⅲとは同品に対する釈文が明らかに異なるため別本であることが判る．ただし，両疏の「法師功徳品」の釈文からほぼ一致する文例が見られるため，どちらかが一方を或いは同じ底本に基づいていた可能性がある．［玉26］（譬喩品～信解品）と注釈形式がよく似ていることが指摘されており（平井［1993: 658］），［玉26］は［P.3308］（方便品・法華経義記第一巻　**利都**法師釈之／比丘曇延許・536年）と思想的に極めて近接することが指摘されている（平井［1993: 659–62］）．実は①は「随喜品」の途中から筆跡が変わることで，写経グルー

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

プの存在を示唆しているが，［P.3308］は本疏と筆跡が類似するところがある．［玉26］は本疏とは明らかに筆跡同じからずと雖も同疏である可能性までは否定できず，この五本の同疏如何を論ずることが今後の課題になると考えられる．

V．［S.2662］・『法華問答』（T.85 No.2752）

『解説』（pp.102–105）に詳しい．通して103番の問答（前後の1問答は残欠）が現存し，始めから46問答までは『法華経』の品順に従って，後の57問答は品順に拘らずに法数要句について注釈する．識語は「方便品十條，譬喩品廿二條，信解品三條，薬草喩品一條，授記品二條，化城喩品一條，壽量品一條，法師功徳品一條」があるが，実際の問答数は識語どおりではない[6]．吉蔵や慧浄の名を出だすことからそれ以降の成立と見られる．『纘述』（『法華論』）を下敷にしたその末註であることが筆者によって論証されている（金［2012: 54］）．『解説』（pp.103–105）には留支訳『法華論』との対比が示されているが再検討の余地がある．

3．今後の課題と展望

古逸部収録本を中心として展開されてきたこれまでの西域出土法華章疏の研究は，以下の二つの時期，すなわち道生や法雲に代表される5～6世紀の半ばまでに成立をみる一群（第1期）と，智顗，吉蔵以降，基までの7世紀を前後として成立した一群（第2期）とに区別されるなか，主に第1期に属する文献を対象にしたものであった．しかし本稿では，第2期に属する文献の解明に努めるべく，この時期の中軸をなす慧浄の『纘述』を中心に，第2期に属する法華章疏において，その影響が顕著であることを究明したのである．

この事実に基づくなら，現に吉蔵の①『法華義疏』②『法華遊意』の異本乃至別本に比定されている①［P.2346］［S.6789］（約2割が翻刻されている・平井［1985; 86; 2000］）［S.4136］②［S.6891］（約2割が翻刻されている・平井［1981］）についても『纘述』との関連性において再考の余地があろう．ちなみに［S.4136］は，浄影寺慧遠の『法華経疏』七巻と推定する説がある（古泉［1986］）．

以上は，『法華経』の注釈史並びにその思想史的推移という次の段階へと研究を進めていくための基礎的な研究であり，今後は正しくこの課題に取り組まねばならない．

1）先達（矢吹慶輝，Lionel Giles，藤枝晃，兜木正亨，平井宥慶）の見解に基づいた筆者の所見．　2）「提婆品」と普門品重頌偈の訳出年時については，野村［1965: 115–

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

20］参照.　3）羅什の訳経を助けたとされる曇影に『法華義疏』四巻の著あることが知られている.（『高僧伝』T.50 p.364a）参照.　4）全144巻のmicrofilmのこと. 黄永武［1981–86］『敦煌寶藏』（新文豊出版）がこれに基づいている.　5）一経四段の分科については，法雲の師にあたる僧印（435–99）のものが知られているが（『法華義疏』T.34 p.452c），本疏の分科とは一致せず，『妙法蓮華経文句』（T.34 p.137a）において示される**北師**の分科が本疏と一致をみる.　6）九品に割当てられる実際の問答数は「序品」4,「方便品」10,「譬喩品」22,「**信解品**」1,「薬草喩品」1,「**授記品**」3,「化城喩品」1,「**安楽行品**」1,「寿量品」1,「**法師功徳品**」2である.

〈参考文献〉

菅野博史［1991］「光宅寺法雲『法華義記』と敦煌写本『法華義記』との比較研究」（『印佛研』40-1），**金炳坤**［2010］「紀国寺慧浄の『法華経纘述』考（1）」（『身延論叢』15），［2011］「法華章疏における五分釈の展開」（『印佛研』59-2），［2012］「同上（2）」（『身延論叢』17），［2013］「六朝古逸『法華経疏』の同本離片に関する一考察」（『身延論叢』18），**古泉圓順**［1986］「慧遠「法花経義疏」写本」（『四天王寺国際仏教大学紀要. 文学部』19），**野村耀昌**［1965］「中国文化と法華鑽仰史の連関」（『法華経の思想と文化』平楽寺書店），**平井宥慶**［1978］「敦煌本・北朝期法華経疏類系譜」（『豊山学報』23），［1981］「敦煌本『法華経義疏開題并玄義十門』」（『大乗仏教から密教へ』春秋社），［1985］「敦煌本『法花経義疏（巻第五）吉蔵法師撰　道義纘集』（一）」（『豊山学報』30），［1986］「同上（二）」（『大正大學研究紀要. 佛教學部・文學部』72），［1991］「無名の『法華経』研究者たち」（『天台思想と東アジア文化の研究』山喜房仏書林），ほか訳［1992］『敦煌Ⅰ（大乗仏典〈中国・日本篇〉第十巻）』（中央公論社），［1993］「敦煌文献よりみた『法華経』研究」（『法華経の受容と展開』平楽寺書店），［2000］「敦煌本『法花経義疏　吉蔵法師撰 道義纘集』」（『三論教学と仏教諸思想』春秋社），**藤枝晃**ほか［1959–63］『スタイン収集文献分類目録解題初稿』（京都大學人文科學研究所／本資料は同研究所附属東アジア人文情報学研究センターの梶浦晋助手の私物を立正大学の手島一真博士を経由して閲覧することができた. ここに記して深く感謝申し上げたい），**矢吹慶輝**［1930］『鳴沙餘韻』（岩波書店），［1931］『大英博物館所藏オーレル・スタイン蒐集燉煌出土未傳古逸稀覯佛典白寫眞目録』（大正大學），［1932］『燉煌出土古寫佛典に就いて』（岩波書店），［1933］『鳴沙餘韻解説』（岩波書店）.

〈キーワード〉　古逸部，慧浄，栖復，『妙法蓮華経纘述』，『法華義記』，一経四段

（立正大学非常勤講師）

NII-Electronic Library Service